Emily Brontë の研究

―その死生観―

宮　川　下　枝

1

T'is moonlight, summer moonlight,
All soft, and still, and fair;
The solemn hour of midnight
Breathes sweetly everywhere.

― Emily Brontë ―　129*

大自然の中に身を投じ空を見上げる時，こよない幸福を感じて成長した Emily Brontë にとって月を眺め，あたりの美しさに浸り，その静寂さに耳を傾けるのは更に指一本を加える必要もない程に完全な幸福感を彼女に与えたのであった。

英国北部のヨークシヤーのヒースの丘を無上に愛した Brontë 姉妹にとって曠野の喜びが如何ばかりであったか。それは，私は前回と前々回と二つの論稿において㈠姉 Charlotte の作品 *Jane Eyre* をとりあげ，その中の月の描写を通してうかがい知ることの出来る主人公 Jane Eyre の心理の動きを捉え，㈡妹 Emily の作品 *Wuthering Heights* に於いて月が作品の筋の構成にどの様な役割を演じたかを検討して来たつもりである。

しかしながら更に Emily の詩を読むに及んで如何にその裏付ともなるべき月の描写の多いことか，どれ程深い愛情をヒースの丘の自然に注いでいたかは驚くばかりでもう一度この問題を取り上げてみたいとも思う程でもあったが，同時に，彼女の小説と詩を読むと彼女が又，如何に多く〔死〕についてうたい，且つ考えているかに驚きの目をみはり，かくも彼女の心を捉えて離さなかった生と死の両面価値コンプレックスについて考えてみたいと思うに至った。

2

もともと世間から隔絶された北英の片田舎の牧師館に住む姉妹達が何等現世的な楽

* 各詩の横の数字は London The Folio Society 版によるエミリー詩集の頁数を示す。

しみを持つことなく内へ内へと内省的に成長していく時，溢るる思い，激しい感情は自ら自然へと向けられ自然を細く観察し，自然に限りない喜びを見出し，自然の奏でる音楽に耳を傾け更に内的な眼を見開いて自分の周囲にある自然の風物に深い愛着を覚えていくのは当然のこととうなづけるのであるが，その詩の中にかくも多く扱われている〔死〕は何の理由からであろうか。又，彼女の唯一つの作品 *Wuthering Heights*（嵐が丘）に於いても〔死〕は一つのテーマであると考えられる程に多くの人物が死んでいくのは何故であろうか。彼女の作品には全面的に濃い〔死〕の影が投げかけられているといっても過言ではあるまい。唯実に多くの人物の〔死〕を扱いながらも陰鬱なセンチメンタルな作品にならなかったのは彼女の溢るるばかりの生命力とこれに由来する旺盛なる闘志の故であろう。旺盛なる闘志はほとばしる力となって作品全体にみなぎっている。エミリーが何故にかくも〔死〕をみつめ，どのように〔死〕を描写し，〔死〕を超克しているかを彼女の小説 *Wuthering Heights* 及び彼女の詩を通して探求してみたい。

3

彼女の詩は，彼女が早くから竊かに書きためていたものを姉シャーロットが見付けその心を高めるような音調と思想に驚嘆して出版をすすめ遂に世に出る段階となったが女流作家は少い当時のこととて男名前で出版したものである。その内容は想像力に溢れる Gondal Chronicles として王党と共和党との争を書いた年代記のようなもので妹 Anne が散文を司り，Emily が詩を書いたと言われている。父 Patrich Brontë のもつアイルランドの血を受けて強烈な魂と豊かな想像力を受け継いだ姉妹弟で秘密に作りあげた想像の世界のなかで楽しんでいたのであった。1826年近くの都市に出た父が十二個の木製の小さな兵隊人形を買って来た。父の話で既に政治に興味を覚えていた姉妹はその人形を生きた人物と考え想像の国をひらいて果てはその国の物語をつくり出すことになった。シャーロットと弟パトソック，エミリと妹アントが組んだ。

4　エミリー，ブロンテと〔死〕の問題

彼女の父は英国北部ヨークシャーの Haworth という田舎町の教区牧師であった関係上ブロンテ姉妹はその牧師館に起居し，それに接する教会墓地の十字架を朝夕眺めて成長した関係上，常に人間の死という問題は彼女の心裡にこびりついて離れなかった。外国の墓地と云へば，芝生の中にゆったりと横わる広々とした場処，品のあ

る墓石を想像し勝ちであるが，写真によれば粗末な十字架の立ち並ぶ殺風景な台地に過ぎない。誠に荒涼たるものである。ヒースの荒野が大好きであり，陰欝な洞穴にもエデンの園を見出すようになったエミリーは憂欝極りない墓石に対しても種々の想像をめぐらしていた。〔死〕は彼女に呼びかけ，〔死〕は彼女に物を考えさせた。そして彼女は〔死〕と対決していった。

更にもう一つの理由があってエミリーは〔死〕というものを非常に身近に感じるようになった。それは相次ぐ肉親の死である。<愛別離苦>は死者自身が味うよりもはたの者の味う苦しみの方が辛く，母と姉と次々に死んでしまい，一番望を托していた弟までが早くこの世を去った時，彼女の悲しみはまさにその頂点に達している。以上二つの事情（circumstances）からして彼女の作品において〔死〕が彼女の両面価値性の一面の価値を担うに至ったことの当然さを私としては十分に納得することが出来た。

では彼女は如何なる態度をもって（死）に対しているであろうか。

"True to myself and true to all" [9]

自己に忠実であるとは19世紀 Romanticism の主流であり Wordsworth（1770～1850）によって提唱され Coleridge（1772～1834）によって受け継がれ更に近代へと伝達され型は変っても守られて来た伝統であるが，彼女もその時代に生きる作家として例外なく常に自己に忠実であって，真剣に〔死〕をみつめ考え抜いた。

Wuthering Heights の中では

(1) Earnshaw (2) Catherine (3) Edgar Linton (4) Hindley

(5) Young Linton (6) Isabella (7) Heathcliff

まだ外にもあるが主要人物としては以上のように沢山の人物が死んでいく。小説の筋書きをすすめる上にも必要な死ではあるが，各々の死を経るにしたがってエミリーの死に対する観念も一段一段と発展の段階を踏んでいることは見逃せない興味深い事実である。

5

死をみつめる —— 肉親の死を経験しない前であったにしろ墓地に眠る人達に思いを馳せることは辛いことではあったが，彼女は懸命に〔死〕をみつめている，それが第一の態度である。

6

死に対する憧れ —— だが〔死〕はこの世の苦痛から遁れることの出来る永遠の休息，魂の慰安の場とも考えられ〔死〕を憧れるのが第二の態度であり，〔死〕の讃美ということはしたがって第三の段階となる。小説の中に〔死〕の姿を流麗な筆致で描写しているのもその現れである。

7

死の不安 —— だが彼女はその陶酔から死にとり憑かれることはなかった。多くの肉親の死に出逢ううちに死は不安，恐怖を投げかけるようになった。これが第四番目の態度である。

死の寂びしさ，死への憎悪 —— 遂に死は敵となる。

8

死に対する覚悟と死を恐れぬ毅然とした態度， —— だが彼女は徒らに死を恐れ，死の不安にたじろいでばかりはいなかった。敢然として死に立ち向う時，勇気は奮いおこされ，思い残すことなく悔いなき迄に自己の主張を通して死んでいく Catherine の死に対する態度は第七番目の段階である。

9

死の超克 (Victory over death) —— 一筋の愛を全うし愛の確信を得て死んでいく Catherine，愛する人の死後も生き抜く責任を果した Heathcliff の死を契機として現れた死の超克こそ彼女の辿りついた解決である。ではその段階にしたがって彼女の大死生観の発展を追求してみよう。

10

死をみつめる彼女の文章と詩句。

(イ) Earnshaw の最後について。

But the hour came, at last, that ended Mr. Earnshaw's, troubles on earth. He died quietly in his chair one October evening, seated by the fireside.

(*Wuthering Heights* ChapterV)

豪農であり「嵐が丘」の持ち主であった Earnshaw 氏が死んでいく。眠るように穏やかに息を引きとってしまったのは Catherine のまだ幼い時の出来ごとで，

I remember the master, before he fell into a doze, stroking her bonny hair—it pleased him rarely to see her gentle—She began singing very low, till his fingers dropped from hers and his head sank on his breast..... but he would not move. (ibid)

死の意味がまだよくのみこめない少女が父の死を見つめているのは幼時から教会墓地の下に眠る人達に思を馳せつつ唯じっと死を凝視していた第一段階の態度と同じである。まだ死を美しいとも憧れとも感じていない。〝手をだらりとたれると頭をガックリと胸に落した〟と見たままの描写がしてある。

(ロ) 死をみつめる態度を数々の詩の中から味ってみたい。

I see around me tombstones grey, 155

'mid northern mountain lone,
His desert grave is made. 163

Time stands before the door of Death 171

There is no snow upon the ground,
No frost or wind or wave;
The south wind blew with gentlest sound
And broke their icy grave. 9

In all the hours of gloom
My soul was wrapt away
I dreamt I stood by a marble tomb
When royal corpses lay. 11

But the cold tenants of the tomb 41

Wasted, worn is the traveller,
Dark his heart and dim his eye;
Without hope or comforter,
Faltering, faint, and ready to die. 26

To leave this wretched world below, 35

In that dark land to which I go.... 35

When I am lying
In the old church beneath the stone, 36

And childhood's flower must waste its bloom
Beneath the shadow of the tomb. 15

(ハ) 死に対する憧れと死の讃美 —

..... and hers of perfect peace. Her brow smooth, her lids closed, her lips wearing the expression of smile; no angel in heaven could be more beautiful than she appeared.

(*Wuthering Heights* Chapter XVI)

一人娘 Cathy を生み落すと Catherine のこの世の生命の火は燃えつくす。激しい熱情的な最後であったが，然し朝の光の中に包まれてベッドに横わるキャザリンの死顔は平和そのもの。

眼をみはるような美しい死の描写である。"額には皺一つなく瞼は閉じ，唇には微笑の色さえ浮んでいた。どんな天使もその時の彼女程美しくはあるまいと思える程だった。"

前回のアーンショー氏の場合も平和な死だったと述べてあるが別に描写はしてないのに反しこちらは，面に現われているものを何一つ見逃さない細い描写であって，その筆致には死を讃美する作者の心がよみとれる。永遠の安らぎを得たその死顔，その屍から漂うものは，唯美しさであって，不気味さでも何でもない。恍惚として見とれている女中ネリーの心は作者エミリーが死に憧れ，死を讃美する心である。心からなる讃美の声をきこう。

"my mind was never in a holier frame than while I gazed on that untroubled image of Divine rest."

(Chapter XVI)

〝私はその人の苦悩を脱した聖なる安らいの姿をじっと見つめていた時程神聖な気

持になったことはなかったような気がします〟

（女中，ネリーの告白より）

(二) Edgar Linton の死について —

死への憧れは Linton の死に対しての態度の中にも読み取ることが出来る。

"I am going to her:and you, darling child, shall come to us!" and never stirred or spoke again; but continued that rapt, and radiant gaze, till his pulse imperceptibly stopped and his soul departed. None could have noticed his exact minute of his death, it was so entirely without a struggle.

He died blissfully...he died so, kissing her cheek,....

(Chpater XXVIII)

〝エドガーさんの死に際は本当に幸福そうでしたよ〟と女中ネリーは語っている。やっと父の臨終に間に合った娘 Cathy を見て安堵の胸をなで下ろし父エドガーは娘に話す。

〝お母さんの待っている処へ行くんだからね。お前もあとからおいで。二人のところへね。〟眼を輝せて娘をじっとみつめたまま苦しみもなくこと切れていく。いつがその臨終であったか分らない程静かに脈は止っている。この完全な平和さは死に対する憧れを十二分に物語っている。

(六) この死に対する憧れは別の面からも現われる。

"... I'm tired of being enclosed here. I'm wearying to escape into that glorious world, and be always there; not seeing it dimly through tears, and yearning for it through the walls of an an aching heart; but really with it, and in it."

(Chapter XV)

〝私はこの壊れた牢獄のような自分の肉体の中にいるのは嫌だ。こんな中に閉じこめられているのには飽き飽きした。本当にあの世に行きたい。〟とキャザリンが女中ネリーに訴える言葉は弱い肉体から抜け出して早くこの肉体をはなれて自由になりたい。あの輝しい世界に行きたいという憧れもある。姉シャーロットは云っている。

〝妹エミリーの最も愛したものは自由でした。自由はエミリーの生命でした。自由

なくしてはエミリーは生きていられなかったのです。〝それは心の自由であり又弱い肉体から抜け出して広々とした世界へ行きたいという憧れでもあったであろう。

(ヘ) このような死への憧れは，死こそ永遠の休息であるという考え方にも起因するものと私は思う。死はとこしえの休息であるとする考え方は，アーンショー氏の死ぬ時の模様を描いた次の文章にも現れており，

"But the hour came, at last, that ended Mr. Earnshaw's troubles on earth...." (Chapter V)

〝アーンショー氏のこの世での苦しみが終る時が遂にやって来ました〟と述べてあり，又，それは彼女の詩集の中の次ぎの詩句にもはっきりと現れている。

You shall win the land of rest. 26

When earthly cares no more distress
And earthly joys are nought to me and rest last
Where tears and mourning cannot come. 34

But thus it was: one festal night,
When I was hardly six years old,
I stole away from crowds and light
And sought a chamber dark and cold. 93

I had no one to love me there;
I knew no comrade and no friends;
And so I went to sorrow where
Heaven, only heaven, saw me bend
I prayed to God that I might die. 93

Darkness was overtraced on every face;
Around clouded with storm and ominous gloom;
In hut or hall there was no resting-place;
There was no resting-place but one——the tomb! 268

O let me die, that power and will
Their cruel strife may close,
And vanquished Good, victorious ill
Be lost in one repose. 221

(ト) 死は休息，慰安であるとして憧れたエミリーではあったが，死に魅せられ，果ては死に誘惑されるまでには至らなかった。

この点同じく死をみつめた女流作家 Virginia Woolf とは異るところである。Woolf は新しい小説形式を世に問い，異色の作品を残して輝しい業績をあげた英国の近代女流作家であるが，実に惜しいことに，遂に死の誘惑に抗しきれずウーズ河に身を投じて死んだ。彼女は非常に頭脳明晰で毛なみのよい文学者の家庭に育ち立派な夫をさずかっていたが，只時々発作的におこる精神異常の為にその都度死ぬ程の苦痛を経験したのであって，只単に死に憧れ死に誘われたとは云えないが死に抗しきれなかったのも事実である。彼女の作品 Mrs. Dalloway には死について次のように書かれている。

She had once thrown a shilling into the Serpentine, never anything more. Buthe had flung it away. They went on living.. They would grow old.. Death was defiance. Death was an attempt to communicate, people feeling the impossibility of reaching the center which, mystically, evaded them; closeness drew apart: rapture faded, one was alone. There was an embrace in death.

〔下線—筆者〕

死こそ自分を抱いて受けとめてくれるもの。死は憩の場所であった。死こそ疲れ果てた魂を受け入れてくれるものであった。

(チ) 死の不安—Linton の死について。

徐々に死に対する不安，死に対する恐怖が頭をもたげてくる。

"I've prayed often," he soliloquised, "for the approach of what is coming; and now I began to shrink and fear it. I thought the memory of the hour I came down that glen a bridegroom would be less sweet

than the anticipation that I was soon, in a few months, or, possibly, weeks, to be carried up, and laid in its lonely hollow!,,, yearning for the time when I might lie beneath it. What can I do for Cathy? How must I quit her? ... and leaving her solitary when I die."

〔*Wuthering Heights* Chapter XXV〕

〔下線一筆者〕

〝娘 Cathy を残して死んでゆかねばならぬ。どうせ死ぬなら早く死にたいと思ったが今では死が恐くなったよ。〟死を真面目に考える場合直面する当然の過程であろう。

To die—and die so far away
When life has hardly smiled for me. 8
Shuddering, to feel the ghostly gloom
That coming Death around him threw. 7

(リ) 死の孤独 —— 又この場合愛する者を残して一人で死んでいかねばならぬと述懐するリントンを通してエミリーの味う死の孤独も滲み出ている。

And then the heath alone will mourn
Above my unremembered tomb. 8

(ヌ) 死に対する憎しみ—

ヒンドレーの死の場合。

平和なカザリンやリントンの死の場合とは，うらはらなヒンドレーの死の場合をさぐってみよう。エミリーには女性作品であろうかと疑われる程の凄惨な描写が事ヒースクリフに関しては用いられているが，ヒンドレーもヒースクリフから生き殺しの目に合わされたような状態で息を引きとっていく。ヒースクリフが常に敵視して復讐を誓った主家の一人息子で今は当然主人であるべき人を博奕に身をくずさせ，その邸は取りあげて，あげくの果てはこの仕打ちなのであるが，苦しみつつ死んでゆくヒンドレーの最後はとりも直さずエミリーの感じている死の惨虐さである。死の不安，死の恐怖そして死の憎しみとも云えよう。

Look on the grave where thou must sleep
Thy last strongest foe— 172

誠に死に対する恐怖に怯え死の不安におののく時人の経験する精神的苦悩は大きく耐え難いものである。死は悪魔に死は不倶戴天の敵に見えて来る。誰しも経験するこの苦しみを彼女とて遁れることは出来なかった。

While foes were prowling near and Death gazed greedily
And only Hope remained a faithful friend to me. 244

(ル) 死に対する覚悟 —— だが人はその苦しみに耐え勇気を以って死を迎えなければならぬ。

かく奮いたつ精神こそエミリーに与えられた賜物でこれのみが彼女に悩み多い不安の時期を耐え抜かせてくれる。

"No Coward Soul Is Mine" と彼女自ら自分を評価して云っている通りである。

(ヲ) Young Linton の死の場合からこれを観察してみよう—

"Tell Mr. Heathcliff that his son is dying— I'm sure he is, this time. Get up, instantly, and tell him."

.... "He is safe, and I'm free," she answered: "I should feel well—but you have left me so long to struggle against death alone, that I feel like death!..."

(*Wuthering Heights* Chapter XXX)

Young Cathy は，ヒースクリフのひどい復讐の手段として彼の息子 Young Linton と無理矢理に結婚させられる処がある。そして唯一人その臨終をみるところがある。もともと我儘で虚弱な肉体の持ち主であったリントンと二人っきり一室に入れられたまま彼女は彼の看護をさせられる。"to struggle against death alone." とあるのは，エミリー自身死と対決する時の精神的な苦しみの現れであろう。死の不安におののき，恐れ，死を考え悩むのは長々しく且つ苦しいものである。だが，"He is safe, and I'm free." とある如く肉体の死によって彼の霊は安全に，私は自

由になったと答えるケージーの答えは同時にその長い苦しみの期間から脱け出して立ち上ることが出来たエミリーの喜びの声でもある。なおエミリー詩集からの次の引用詩句をごらん下さい。

So, of a tear, when thou art dying,
Should haply fall from me,
It is but that my soul is sighing
To go and rest with thee. 125

What have I dreamt? He lies asleep
With whom my heart would vainly weep;
He rests, and I endure the woe
That left his spirit long ago. 115
What though our path be o'er the dead?
They slumber soundly in the tomb:
And why should mortals fear to tread
The pathway to their future home? 115

Through life and death
A chainless soul,
With courage to endure 151

Dead, dead is my joy. 82

Then come again—thou wilt not shrink,
I know thy soul is free from fear—
The last full cup of triumph drink,
Before the blank of death be there. 119

(ワ) 死に対する雄々しい態度—

キャザリンの死の場合

"You and Edgar have broken my heart, Heathcliff!... I wish I could

hold you, till we were both dead! Why shouldn't you suffer? I do! I shall not be at peace.... I only wish us never to be parted: Heathcliff, dear! you should not be sullen now. Do come to me, Heathcliff.... Let me alone. Let me alone, if I've done wrong, I'm dying for it. It is enough! I forgive you. Forgive me too:... Oh, don't, don't go. It is the last time! Heathcliff, I shall die! I shall die!"

(*Wuthering Heights* Chapter XV)

愛する人を忘れかね国外に遁れたヒースクリフであったが二年後再び嵐が丘に帰って来る。

キャザリンの病篤しの報をきくや矢も楯もたまらず，リントンの留守を見計うと，大胆にも彼女の家にやって来る。禁断の家であるにも拘らず，女中ネリーの止めるのもきかず侵入して来る。彼女の部屋を見つけると，大股に一足二足……，もう彼女を抱き締めていた。五分ばかりというものは口も利かなければ手を弛ることもしなかった。

だがその激しい愛に，なよなよとくずおれて死んでいくキャザリンではなかった。

〝あなたとエドガーの二人の為にあたしのこの生命ははり裂けてしまった。あたしはあたし達二人が死ぬ迄こうしてあなたにしがみついて居たいのよ。私だけが何故苦しむの。……別れたくないわ，私が悪かったら許して下さい。私はあなたを許してよ。もうお別れ，さあ……ゆかないで。私は死ぬのよ"

キャザリンの最後の叫びであって，死を直前にして堂々と云うべきことは云い尽し，死を迎える彼女のこころは死に動じないニーチェばりの超人的な権力意志に満ち溢れていた。自分の感情を素直に打ちあけることの出来なかったキャザリンには，死を前にして始めて，真実を語る素直さが現れた。

ではいよいよ結論へと急ごう。

(カ) 死の超克— Catherine の死の場合。

In her eagerness she rose and supported herself on the arm of the chair. At that earnest appeal he turned to her, looking absolutely desperate. His eyes, wide and wet, at last flashed fiercely on her: His breast heaved convulsively. An instant they held asunder, and then how they met I hardly

saw, but Catherine made a spring, and he caught her, and they were locked in an embrace from which I thought My mistress would never be released alive; in fact, to my eyes, she seemed directly insensible.

(Chapter XV)

地上では一体となることの出来なかった二人であったが，この激しい抱擁裡に熱烈な愛を確め合って精神的に一体となった二人は，その直後に待っているものが死であろうと，死は勝利の凱旋以外の何ものでもなかった。

"Oh, Cathy! Oh, my life! how can I bear it?" ヒースクリフはキャザリンの命がもう助かる見込みのないことを悟って悲痛な声を出すが，キャザリンには決して死は絶望ではなかった。死は決して肉体のみの滅亡ではなかった。あらゆる精神的苦悩に耐えながら，今始めて "Oh, my life" の声をヒースクリフから聞き得たのであれば，凱歌を高らかに奏しつつキャザリンは死を迎えたのであって誠に死は勝利であった。

That love that first its glory gave
Shall be my pole star to the grave. 27

愛こそ死を導く星である。愛を全うした時，死も一つの勝利である。

(3) 死の超克 —— ヒースクリフの死の場合。

"I could not think him, dead; but his face and throat were washed with rain; the bed-clothes dripped, and he was perfectly still... I tried to close his eyes; to extinguish, if possible, that frightful, life-like gaze of exultation... they would not shut; they seemed to sneer at my attempts; and his parted lips and sharp white teeth sneered too!

(*Wuthering Heights* Chapter XXXIV)

ヒースクリフの顔色が悪く，ふるえている。しかも彼の眼には不思議な嬉しそうな輝きがあって，その為に彼の顔全体が違ってみえた。食慾は全くなく夜通し歩き廻っていた。心配した召使が無理に食べさせようとするが，ナイフとフォークをとって食べかけた彼は，急に窓の方をむいて立ちすくんでしまった。そして庭に出てしまった。実に嬉しそうに興奮し続けていた。時々歯をむき出して笑い，体もふるえている

が，ピンと張った肱が震えでもするようなはり切った喜びの中に彼は死んでいたのである。エミリー独特の想像力によっての凄ましい迄の而も巧妙な死顔の描写であるがその歯をむき出した顔の中に歓喜の笑いを浮べ，眼はカッと見開いたまま閉じさせようとしても容易に閉じない程の強さで以って酔うた者のように死んでいったのは何故であろうか。彼こそは死の誘惑に負けなかったのである。〝キャザリン，おお我が生命よ〟と叫びつつ見送ったキャザリンの死。異体同心であると信じたキャザリンを失ってからは，生きのびることは辛いことであった。が彼女を追うような弱い人間では彼はなかった。ヒースクリフは自分であると告白した程のエミリーであればこのヒースクリフの雄々しい精神は，とりも直さず，エミリーの強い魂そのものであった。

"You said I killed you—haunt me."

〔*Wuthering Heights* Chapter XVI〕

「霊よ出でよ」と叫んだヒースクリフにキャザリンは幽霊となって20年もの間悩ましし続けて来た。その試みに耐えぬいてよくも生き続けてきたヒースクリフではあったが遂に肉体の衰弱を自覚した時近づいてくる死を直感して自分の責任を果たし得た喜びに震えた。任務を果しおおせたヒースクリフは遂にキャザリンのもとへ行くことを許されたのであった。

エミリーの信じていた唯一筋の愛の完成されるや否やヒースクリフは許されてキャザリンの処へ行った。残虐な復讐に明け暮れた鬼のような彼の行為はこの一途の愛によってのみ壮厳された。これこそ高らかに奏された死の凱歌であって，彼にとっては死の勝利そのものであった。

But God is not like human kind;
Man cannot read the Almighty mind;
Vengeance will never torture thee,
Nor hunt thy soul eternally. 123

〔11〕 死に附随した思想

エミリーは死を考える時常に死人の霊が亡霊となって現われるものと思っていたし，又死ねばあの世にいくのだとも述べている。

The intense horror of nightmare came over me: I tried to draw back my

arm, but the hand clung to it, and a most melancholy voice sobbed, "Let me in—let me in!"....

"Catherine Linton," it replied, —"I'm come home: I'd lost my way on the moor!" As it spoke, I discerned, obscurely, a child's face looking through the window. Terror made me cruel;

〔*Wuthering Heights* Chapter III〕

夜中ロック・ウッドのもとへ幼い子供の顔が窓をのぞきこみ入れて入れてと叫ぶ。亡霊である。

It was just the time of eve.
When parted ghosts might come. 11

〔エミリー詩集より〕

"Mrs. Heathcliff, your wife, I mean."

"Well, yes—oh, you would intimate that her spirit has taken the post of ministering angel, and guards the fortunes of Wuthering Heights, even when her body is gone...."

〔Chapter II〕

〝家内の霊が守護神の位について死んでからでも嵐が丘の家を守ってくれればいいのだが—〟

Then I hope his ghost will haunt you; and I hope Mr. Heathcliff will never get another tenant till the Grange is a ruin!"

〔ibid〕

〝そんなことを言っているとあの人が死んだ時化けて出るよ〟

"But the country folk, if you ask them, would swear on the Bible that he walks;..."

〔Chapter XXXIV〕

ヒースクリフの亡霊が歩いていた。

The memory of their sister Maria, who died in childhood, became a sort of cult with the Brontës, and the little childish face that peers in at the window at night in Lockwood's dream in Wuthering Heights was something they had all seen, or thought they had seen. It is Maria's angelic spirit that so often visits Emily....

〔Introduction to *the Poems of Emily Brontë*〕

エミリブロンテの詩集への序文に依れば，幼時に亡くなった姉マリヤの思い出は姉妹にとっては一種の偶像崇拝的なものになっていて，マリヤの天使のような霊は始終彼女に訪れて来るような空想の世界にエミリーは浸っていた。窓に現われるキャザリンの顔も姉妹には本当のマリヤの顔を窓辺に見たようにさえ思われたのであった。

"Whether still on earth or now in heaven, her spirit is at home with God!"

〈彼女の死後の霊は神のもとにある〉ネリーは信じている。

...but we'll leave her with her Maker.

〈つくり主の処へおかえししましょう〉

"Your pride cannot blind God! You tempt Him to wring them, till He forces a cry of humiliation."

(*Wuthering Heights* Chapter XVI)

"...Gone to heaven, I hope; where we may, every one, join her,..."

(Ibid)

天国へ行かれたことと思うのですが……と女中ネリーはヒースクリフに告げる。天国，神と云った言葉が沢山出て来るがここは豊田実博士の読解の説明—

（但し Catherine の行かんとする世界はキリスト教の普通に考える天国とはおよそ違った世界のようである）—

を借りて簡単にすませておこう。

Ⅲ まとめ

以上私はエミリーブロンテのもつ〔死〕の観念に興味ひかれ，先づその環境より

〔死〕を常に考えるに到った状況を述べ，その作品 *Wuthering Heights* 及び詩を通して彼女の抱く死に対する思想の発展段階を探求してみた。かく一人の作家が如何に死の不安から立ち上り死の勝利の確信に到達し得たかということは我々にとっても非常な勇気を鼓舞してくれるものである。死を如何に解釈するかは，自ずと如何に生を解釈するものであるかにも通ずるものと思い敢えてその死生観と題したわけであるが，エミリー自身虚弱な肉体にも拘らず，死の魅力にとりつかれることもなく強い精神で生き抜いたことは，ヒースクリフの熱情そのもの，又荒野に咲く野生の花にも似た力強さである。肉体は弱りつつある時精神的にはますます強く，肉体の苦しみに勇敢に耐えていった。死の当日も起き上り着物を着換え髪をとかして，よろめきつつ階下に降りて行き，それ迄は頑強に医者を拒み続けた彼女も喘ぐ息のもとから「医者を」と頼んでソファに腰を下ろしたまま息絶えたのである。

次は姉シャーロットの妹に対する心からなる讃辞である。

Never in all her life had she lingered over any task that lay before her, and she did not linger now. She sank rapidly. She made haste to leave us. Yet, while phisically she perished, she grew stronger than we had yet known her. Day by day, when I saw with what a front she met suffering, I looked on her with an anguish of wonder and love. I have seen nothing like it, but, indeed, I have never seen her parallel in anything. Stronger than a man, simpler than a child, but her nature stood alone." December 19, Emily Bronte died at 2 p.m. on the black leather dining-room sofa at Haworth Parsonage.

荒野の月は今も静かにヒースの丘を照していることであろう。雄々しい精神を持ち通したエミリーブロンテの墓に捧げる一束の花としてここに彼女のうたうヒースの自然の詩をかかげてこの小論文の終りにしたい。

The moon is full the winter night;
The stars are clear though few:
And every window glistens bright

12 エミリー・ブロンテに残された最善の生き方 — 彼女の個性と環境にマッチする最善の生き方 — すなわち実存主義思想の先駆をなしたフリードリヒ・ニーチエ(1844～1900)の鼓吹した創造的な<力への意志>と<運命愛>との思想をエミリー・ブロンテ(1818～1848)は，ニーチエが生れるより前に彼女の小説<嵐が丘>と一巻の詩集によって力説していることは，まことにわれらの驚歎に値するヨーロッパ思想史上の事実 — しかも全世界人から雲煙過眼視されてきたヨーロッパ思想上の重大なる事実である。と私は考える。エミリーこそ19世紀ヨーロッパ文学における最初の実存思想的アドベンチャラズ・ロマンチストの作家ではないでしょうか。彼女程自分がその中に置かれた個性と環境すなわち自分の運命を愛好して自主的にこれに対応する最善の生き方を開発するべく命をかけて闘った雄々しい魂 (adventurous (Soul) はなかろう — 否，有っても女性としては稀であろう。しかしこの論文に於いては如何に彼女が死ぬことのよろしさと生き抜くことのよろしさとの運命的な両面価値コンプレックスを気ッ腑よく引き受けてこれと対決したか？に問題を限定して考察を進めて行ったのであります。

参　考　書

Wuthering Heights

With a preface and memoir of Emily and Anne Brontë by Charlotte Brontë

(London, Oxford University Press)

Wuthering Heights 註，豊田実(研究社)

Emily Bronte her life and work

by Muriel Spark and Perek Stanford

(London, Peter Owen Limited)

The poems of Emily Brontë

(London, The Folio Society)

The Complete Poems of Emily Jane Brontë
(New York; Columbia Unuiersity Press)

V. Woolf
Guide to 20th century
English and American Literature. (研究社)

ヴァジニア・ウルフ　神谷美恵子
(精神医学誌論文)
42年5月15日

ブロンテー姉妹　阿部知二(研究社)